

連載：
フィルム・アーカイヴ
の諸問題
第1回

フィルムセンターは、1952年に国立近代美術館(当時)内の「フィルム・ライブラリー」として開設された当初から、映画および映画関係資料の保存と公開の方法を日々の業務のなかで体験的に学んできましたが、ここ数年は、FIAFに加盟したこともあり、FIAFの他の加盟機関の仕事の内容や歴史を比較検討したり、より科学的、体系的な方法論と国際的なスタンダードに適合するノウハウを研究したりしてきました。

わたしたちは、こうして蓄積された知識や情報を「フィルム・アーカイヴの諸問題」という論文集の形でこの「NFCニューズレター」に連載することを通して、フィルム・アーカイヴ／シネマテークの重要性を広く啓蒙し、将来にわたる課題を指摘していこうと考えています。こうした研究活動は、次代の映画保存を担ってくれる人々や「映画の〈次の〉百年」そのものにとって意義深いことであるのみならず、映画フィルム以外の映像メディアの正しい保存と活用のためにも役立つところが少なくありません。

この創刊号ではその第1回として、「映画資料・情報の集積と利用に向けて」を掲載します。映画を心から愛する皆様のご一読をお願い申し上げます。(H.O.)



フィルムセンター外観

映画資料・情報の 集積と利用に向けて

佐崎 順昭
Yoriaki Sasaki

ある偉大な映画人が天寿を全うして亡くなったとしよう。彼はその几帳面な性格から、自分の関わった作品については、ありとあらゆる資料を手元に残していた。彼の作品に感銘を受けていた人々は、その資料を散逸させることなく後世に伝えることで、彼の業績に報いようとした。しかし、その膨大な資料を前にして人々が抱いた感慨は、他の分野の芸術家、例えば小説家や画家、音楽家といった人達に対するのとは、まったく異なった困難さを伴うものであった。基本的にいえば、その偉大な映画人の手元には、オリジナルな形で1本の作品(プリント)も残っていないのが普通である。映画はその初期の段階から産業に移行していたため、芸術家の、作品としてのフィルムは、映画人個人ではなく製作会社が所有しているのが現実である。また、1本の映画は、多くの人々が集まって作られていくため、各職能の人々との関係が多くの資料となって残ることになる。さらに、商品としての映画の流通形態が、配給・興行段階で必要とされる各種の多様な宣伝材料を生み出していくため、作品に関連した資料が基本的に多岐にわたってくることになる。

個人の表現をもとにした芸術と違って、映画は、作品自体が複製芸術であること、製作自体が集団で行われること、受容のされ方が商品としての色彩を強くもっていることなどにより、作品や作者のまわりに生み出される資料の量と重要性が、他の分野とは際だった形で強いものとなってくる。例えば、商品としての書籍を考えて見た場合、本に対する宣伝広告と映画のそれとの違いはより明らかになる。文学を愛読したり研究したりする人々が、映画の場合のようにその宣伝広告資料に、同じように価値と愛着をおくだろうか。逆に言えば、映画ほど言葉や図像やものによって取り巻かれた芸術もほかにはないのである。つまりは映画ほど関連資料や二次資料が多い芸術もまたないといえる。それを付属資料というには、あまりに深く本質とかかわっているのだ。

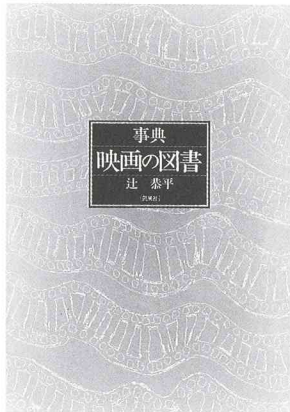
こうした映画を取り巻く関係資料については、フィルム・アーカイヴの活動のなかでも、映画フィルムを適正な状態で保存し、ある基準をもって目録化し、しかるべきテーマのもとに上映するといった基本をなす仕事と同じ比重をもって位置付けられている。それは映画フィルム以外の資料ということで、ノン・フィルム・マテリアルまたはノン・プリント・マテリアルと呼ばれており、ドキュメンテーション部門がその責任をになっている。ドキュメンテーション部門の存在意義と目的は、映画という芸術形態が

本質的に生み出していく関係資料の全てを、収集し、保存し、情報化し、公開するというものである。その際、有力な窓口として機能するのが、映画専門の〈図書館〉である。そこに集積された資料の充実と整備が、映画研究を助ける上での基本環境の整備ともいえるし、映画書誌作成(映画人名事典や映画事典を含む)の作成や、ひいては自国の映画作品総目録(ナショナル・フィルムグラフィ)の完成といったプロジェクトの実現に向けての、予備調査を可能にする場所ともなるのだ。だが、映画のかかえている関係資料の全てを、収集し、保存し、情報化し、公開するとすれば、それはすでに〈図書館〉の枠組みを越えて、〈博物館〉の規模を必要とすることになるだろう。とはいえ、まずは着実な第一歩を踏み出さなくてはならない。以下に、フィルムセンターの現状を踏まえながら、個々の映画関係資料についてふれてみることにしよう。

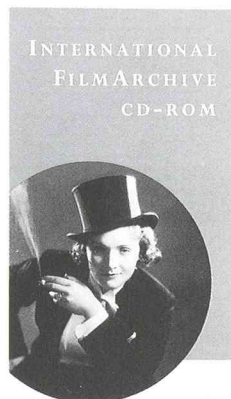
まず、映画について書かれた書籍ということで単行本からみてみよう。日本においては、明治29年(1896年)末にエジソンのキネトスコープが公開されてより間もなく、新しい発明品である〈活動写真〉についての解説書が書かれた。それ以来この100年の間に、約7,000冊をこえる書籍が刊行されており、フィルムセンター図書室では、その7割にあたる約5,000冊を所蔵している。映画理論や評論集、映画史について書かれたものや技術書、シナリオ本など、さらに監督や俳優についての評伝、随筆といったように、分野は多岐にわたっている。これらを分類するにあたっては、日本十進分類法によることの不備が、以前から指摘されていた。これまでに出版された映画書誌3冊のうち、最初に出版された書誌的記述において高い精度を誇っている「日本映畫書誌」(山口竹美著、映画評論社、1937年)は発行年月日による配列であるから問題ないとして、日本十進分類法(新訂7版)に準拠した「日本映画文献史」(今村三四夫著、鏡浦書房、1967年)は多くの問題を抱えていた。日本十進分類法のうちで、芸術(類目:700)、演劇(綱目:770)、さらにそのうちの要目778が映画となっているが、小数点二桁の細目の部分の十進分類で、「コンティニュイティ」や「色彩映画、シネマスコープ」「幻燈、スライド」などが一つの細目として「理論」や「映画史」などと同じレベルでたてられているなど、分類の不均衡や時代の変化による齟齬が多く、映画専門の分野で考えた場合、実用に合わないことは明らかである。^{注1}

そうしたことから1989年に刊行された「事典

映画の図書」(辻恭平著、凱風社)では、著者の考案した独自の十進分類法が採られることになった。今回フィルムセンター図書室でも、この辻恭平氏による分類体系を採用することになったが、それは、この書誌が信用にたる映画書誌の集大成であることに加え、そこに採録されている書籍の多くがこの書誌の取材源になっていること、その本はもと辻氏の所蔵本であり、1978年に旧京橋でフィルムセンター図書室が開室されたとき以来、その収集・整理に辻氏自身が当たられたことなどの理由による。その分類項目は10の大分類、33の中分類、88の小分類に分けられているが、小分類については今後時代の変遷とともに新たな項目の追加などがありうるとしても、現段階では大分類の10項目については変更や見直しは考えにくいところである。国際的な標準化の点でいえば、フィルムセンターが加盟している国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の推奨している分類項目^{注2}との整合性が問題になるが、それについては今後の課題である。



辻恭平著「事典 映画の図書」



Now access to the knowledge
of the world's film archives...

FIAF発行のCD-ROMの案内

次に、一般に逐次刊行物といわれる映画雑誌についてみよう。単行本とちがって月刊や旬刊で発行されるサイクルが、映画興行のサイクルと同じ頻度をもっていたため、〈映画雑誌〉は映画産業の発達に伴って隆盛を極めた。特に現在のようにビデオやレーザーディスクなどで個人が作品を手にとることのなかった時代、特に昭和10年代や昭和30年代に出

されていた雑誌の量や種類の多さには目をみはるものがある。新作の紹介や物語、批評や記録に重点をおいたもの、宣伝媒体を中心にしたグラフィックなもの、出版形態でいえば出版社から出される通常のものから各撮影所や映画俳優の後援会誌、映画ファンや学生による同人誌など、ジャンルでいえば日本映画や外国映画を中心としたもの、現代劇や時代劇を中心にしたもの、教育映画や小型映画を扱ったものとさまざまである。それらは、映画フィルム自体さえこえた、情熱の賜物である。現在、そうした映画雑誌の総体を把握するには、同時代人の情熱にも増して多くの情熱と労力

が必要であり、その際、索引作りは必須のこととして望まれているが、環境整備も含めてそこには多くの困難が伴っている。^{注3}

(以下次号に続く)

注1：現在は新訂8版(1978年)によるが、若干の削除や修正がみられるのみである。

注2：FIAF classification scheme for literature on film and television. 2nd ed. by Karen Jones and Michael Moulds. FIAF 1992.

注3：フィルムセンターでは約300種43,000冊の映画雑誌を所蔵しているが、保存上の理由やデータ採録の進行状況などもあり公開にいたっていない。現在その整備を進めているところである。FIAFのドキュメンテーション委員会では“International Index to Film and Television Periodicals”で世界の映画雑誌の索引作りを年刊で刊行しており、1993年で22巻を数えている。現在その一部はCD-ROM化もなされている。



フィルムセンター正面入口



大ホールホワイエ



展示室